

職人が長い熟練を経て鍛え上げた 強さと美しさが宿る組子細工



今年の春、黄綬褒章を受章した黒津鐵夫さんは、建具職人として福島県内唯一の国が表彰する「現代の名工」です。子どもの頃から器用だったというその腕を磨き続け60余年。近年は、組子細工の分野において自ら工具を考案。伝統的な意匠である亀甲組をベースにした衝立や組子の戸襖など、その作品はまるで幅の絵画のようだと全国でも高い評価を受けています。黒津さんをとりこにした組子細工の魅力と建具職人としてのこれからの話をお聞きしました。



「現代の名工」建具職人
黒津鐵夫さん

26歳で独立。機知に富む 仕事で引っぱりだこ

子どもの頃から手先が器用で中学校時代は運動会の看板作りまで手伝っていたという黒津さん。この世界に入ったのは、恩師の薦めがきっかけでした。26歳で独立した時は、高度経済成長期の真ただ中。新居の欄間や書院障子などを手掛けていましたが、お客様の要望に合わせて、次々にデザインを変えたとはいえず、機知に富んだ仕事と確かな技術が大

工棟梁たちの間で評判になり、寝る暇もないほど忙しい毎日を送っていたそうです。

組子細工の奥深さに 魅せられて

本格的に組子細工に取り組みようになったのは、60歳を過ぎてから。最初は、本や写真を参考に作り始めました。3本の細い板を正確に組み合わせる「三ツ組手」といいます。「これが基本です。後は、組み合わせ方。奥深い世

Tetsuo Kurotsu PROFILE
昭和13年福島市生まれ。中学校卒業後、福島市内の木工所で10年間にわたり建具技能の研鑽を積む。昭和39年に独立。黒津建具店を自営し業界団体の運営に参画。自身の技術を同業者に広く公開し、業界の技術向上と発展に貢献。60歳を過ぎてから本格的に組子細工に取り組み、ほぼ独学で精進を重ねる。平成22年、全国建具展示会で厚生労働大臣賞を受賞。平成25年、黄綬褒章受章。国内最高レベルの技能者が集う全国伝統建具技術保存会の会員として、重要文化財の修復に当たるほか、若手の指導にも力を注いでいる。

界のとりこになりました」。細かく刻んだ木に溝や角度を付けてさまざまなパーツを作り、模様を組み立てていく技術は独学。元来、工夫好きの黒津さんは、道具も考案し0.01ミリ単位での微調整加工も可能にしました。後に全国建具展示会に出品するようになり、そこで刺激を受けさらに自己研鑽。鍛え上げた技術と豊かな表現力で現代の名工に選ばれるまでになりました。

現在、黒津さんは、福島県内のイベントなどに参加し、組子を通して子どもたちにもものづくりの面白さを伝えていきます。また、国内トップレベルの技術者が集まる全国伝統建具技術保存会のメンバーとして国の重要文化財の修復にも関わるなど八面六臂の活躍をされています。「今年、京都の知恩院に行ってきました」。昔の人の技術は、知恵と工夫の塊。絶やしてはならないと若手の指導にも力を注ぐ黒津さん。自らの技術を惜しげもなく若者に伝えながら、自身をさらに高めて行くこうとす姿に、組子のような美しさと強さを感じました。



1 木材の自然の色を組み合わせで作ったパーツ 2 パーツは、0.1ミリ違うだけでも合わなくなる。緻密に計算してもその通りにはいかない。さじ加減がある 3 伝統的な意匠「亀甲組」 4 基本の地組にパーツをはめ込む 5 菱形を組み入れ金づちで仕上げる黒津さん

木材の天然の色を生かして吾妻連峰と梅をデザインした衝立(右)。組子のランプ(下)。高い技術は、全国レベルの展示会でも高い評価を受けています。黒津さんの作品は、福島駅西口のクラッセふくしまにも展示されています



毎年夏に「まちなかものづくりワークショップ」、秋には「福島市名工展」が市内で開催されます。コースターやペン立てを作る体験教室は、毎回大盛況。不思議なパズルのような組子にみんな夢中！左は体験教室のために黒津さんが用意したさまざまな木片のパーツ